



随 筆

近頃想うこと

坂 田 祥 光*

4月下旬、教授室の様態替えのために一人で家具の移動を行ったため、ぎっくり腰になり、せっかくのゴールデンウィークを家で横になって過ごすという情けない羽目になってしまった。しかし、幸運にもその折、衛星放送で丸二日間にわたって宮沢賢治特集が組まれており、これを観て過ごすことになった。

今年は宮沢賢治生誕百年で多くの催しがさまざまなメディアで繰り広げられており、この特集もその一環であった。中でも興味深かったのが映画「風の又三郎」であった。それも同じ題材について昭和15年と平成元年製作という年代の違うものが二本続けて放映された。実はこの古い方の映画は小学生の時に観た記憶がある。娯楽の少なかった戦後間もなくの田舎では小学校の講堂で良く映画鑑賞会が開かれた。電力事情が悪く、たび重なる停電に悩まされながらも、いろんな映画を楽しんだ。「風の又三郎」もその中の一つであった。

今回、半世紀振りに再見することになって前回の記憶がどの程度残っているかが観る前の興味の中心だった。鑑賞し終わって愕然としたのはどのシーンも全く初めて観ると思われるものばかりで、昔の記憶につながるものは何一つなかったことである。しかし、不思議なことに映

画の中で歌われている歌はメロディーも歌詞も鮮明に記憶していた。

どっどど どどうど どどうど どどう

甘いりんごも吹きとばせ

酸っぱいりんごも吹きとばせ

どっどど どどうど どどうど どどう

映像の記憶と音声の記憶とがこんなに異なることを経験したのは初めてである。これは小生の興味の関心度に差があったためなのだろうか。あるいは映像と音声とでは記憶への刷り込み方が異なるためなのであろうか。

しかし、最も興味深かったのは新・旧の映画に出てくる少年達の顔付きの変化である。古い方の子供達はいずれも引きしまって精悍な野生味のある面構えをしていたが、新しい方では反対にしまりのない、何となく精気に欠ける弱々しい感じの顔付きであった。子供達が主人公の映画なので新旧どちらの監督も、少年達の人選には心を砕いたであろうからこの差は個人的な差と言うよりは年代的なものとして受け取って良いだろう。

それにしても50年ほどでこうまでも顔付きが変わってしまうとは全く驚きである。平和で、物質的に豊かな社会が到来して緊張感が欠如したのがその原因であらうか。あるいは軟らかい物ばかり食べているせいで顎が退化したためであらうか。あるいは一人っ子のせいで大切に育てられたせいであろうか。はたまた、餓鬼大將などとの交流がなかったせいであろうか。いずれにせよ世の移り変わりが凝縮されて顔の変化として現れているように思われるのである。

昨年初めから阪神大震災、オーム事件、住専、大手銀行の不祥事とこの先わが国の将来が危ぶまれるような事件が立て続けに起こった。天災

* Yoshiteru SAKATA
1938年5月14日生
1962年大阪大学理学部化学科修了

現在、大阪大学産業科学研究所有機物性化学研究分野、教授、理学博士、有機化学

TEL 06-879-8475

FAX 06-879-8479

E-Mail sakata@sanken.

osaka-u.ac.jp



である阪神大震災は別として、他は人災である。これらがバブルの崩壊による一過性のものであれば良いのだが、日本社会が内部崩壊あるいは芯から腐ってきていることの現れの可能性もある。どちらであるかは次代を担う若者の挙動からある程度判断できよう。したがって、先の少年達の顔付きの変化が気にかかるのである。

外国へ出かけると、きらきらと輝いた目をして知的好奇心にあふれている若者の顔に出会うことが多い。理想や未来の世界に向かってまっしぐらにつき進んでいるという感じで我々中年にはまぶしい存在だ。出会う頻度は発展途上国において最も高いが、欧米諸国においても少なからず見られる。残念ながら日本ではこの手の顔に逢うことが少なくなったと日頃感じている。何時の頃からこんなに変わったのかよく判らないが、田中角栄内閣以後日本が急速に物質的に豊かになった以後であることは間違いあるまい。「太った豚より、やせたソクラテスになれ」とか“full stomach and empty soul”という言いまわしがあることから考えて、物質的豊かさと精神的豊かさあるいは向上心とが両立しがたいことは洋の東西を問わず共通しているであろう。日本の場合にはこれに加えて特殊事情が作用していると思われる。

科学研究の上でも事情は似ていて精神的にハングリーでないと画期的成果が出にくい様に思われる。米国の様な多民族国家だと少数民族の優秀な人達がこの役割を果たしていると言われている。事実、ゴートン会議などで見かける若手で優秀な人達はたいていこうした少数民族の出身だ。これに反して、社会のほぼ9割が中流意識を持っている日本では上昇指向の動機づけに欠ける。科学研究の段階を昇りきったとき名誉や権力は多少ついてくるかも知れないが、経済的な成功物語は日本では少い。近年問題になっている若者の理科離れ現象は意外とこの様なことが原因となっているのかも知れない。昨今、科学研究費の増額や提案公募型研究の創設など個人の研究に対する財政支援がますます手厚くなりつつある。何でも平等という風習の是正という点では好ましい方向であり遅きに失したと言ふべきであろうが、さらに進んで個人の研究

成果がその個人所得までを大きく左右するといふところまではなかなか到達しそうにない。同一職種における同一年令同一賃金が競争社会に適合しないのは明らかだが、日本の大学ではまだこれが続いている。おそらく大学が民営化されるまで続くのであろう。

日本で科学研究を行うのに不都合な点は社会全体が平等主義的価値感で動いているのに、科学研究の分野では個人主義的な価値感に変更せざるを得ない点であり、異なる文化とたえず同居していることに、何となく居心地の悪さを感じる。似た様なことを討論の場でも感じる。戦後価値感が大幅に変わったとはいえ、我国では儒教の影響が色濃く残っている。年長者をうやまい、父母に孝にというのは今の世でも遵守すべき徳目である。日本語もしたがってそれに応じた構造となっている。尊敬語や謙譲語がたくさんあり、それらを適切に使いこなさなければならぬ。したがって、年長の先生の説に日本語で異論をとるという場面に遭遇すると、論法鋭くという討論口調に尊敬語や謙譲語が入るものだから、迫力がなくなり、論点が不明瞭になってしまったりする。英語だとこの様なことはない。研究室や学会などで欧米のように白熱した討論がほとんど行われないのはこの様な日本語の問題と深くかかわっているのではなかろうか。したがって、年令、性別を越えて実りある討論を日本語で行うことへの壁はまだまだ厚いのではないだろうか。

我々が若い学生からぞんざいな口調で学問上の討論をうけたり、研究上の誤りを指摘された時にただ話し方が悪いというだけで不愉快に感じるのであれば、学問、研究の育つ土壌がまだ完全ではないということなのだろう。また、一方独創的研究を！とよく叫ばれるが、独創的人間つまり変わり者を日本の社会は排除してきたのではなかったか。制服などを着せられて皆と同じように振る舞うよう教育され、その雰囲気の中で育つと、変わったことを考える頭の回路が退化してしまうのではないだろうか。このあたりの日本文化と科学研究の育つ風土との折り合いを今後どうつけていくのかは、なかなか解決しがたい問題である。自分自身の場合を考

えても日本の文化も大切にしていきたいし、科学研究も推進していきたいということで、いつまでたってもあいまいな立場に立っている。

では、若い人達にいきいきとした顔を取り戻すのにはどうしたら良いのだろうか。そんなに近道はないだろうし、これに関して十人十色の意見があるだろう。私自身の希望としてはまず20才以下(未成年)の者に対しては社会的規律をもっときびしく教えたい。「がんこじじい」「いじ悪ばあさん」の復活である。嫌われることを覚悟の上でこのような役割を演じていくことの大切さをこういう人達がいなくなって初めて認識できるようになってきた。「鉄は熱い中に打て」「麦ふみ」の効用である。一方、20才以上の者に対しては徹底して本人の自由にさせる。その代わり責任はすべて本人が負う。日本ではこの辺の区別がはっきりしていないので、成人になっても子供扱いをしたり、あるいは逆にそれを利用して都合の良い時は成人扱いを都合の悪い時は小人扱いを要求する。こうした「甘えの構造」をなくしていくのは並大抵のことではなかろうが、若者の真の意味での自立意識がない処に真の希望にあふれる姿もないのではなかろうか。その意味で親が子供に多大の物質的援助をするのは良くないことだという社会的コンセンサスを作りたいものだ。西郷隆盛の「兄孫に美田を買わず」というのは長い目で見て若い世代にプラスに働くことをもっと認識すべきだと思う。

若者に対して苦言ばかりを呈してしまったが、立派な若者もいる。N君は大学院修士課程を終了後、一流化学会社に就職し、その企業の将来の種となるであろう研究プロジェクトに従事していた。研究がかなり進んだ後、その分野の第一人者であるドイツの教授の処で更に研鑽をつむべく会社とドイツの教授とに話をつけ、2年間留学した。帰国するとプロジェクトチームは

解散寸前であった。残務整理をして1年後このプロジェクトを中止するにしのびないという想いと更に研究を続けたいという想いにかられ、会社を円満退社して奥さんともども渡独し、ドイツの大学のドクターコースに入学して研究にはげんでいる。経済的困難や語学のハンデキャップに耐えて明春にはドクターを取得出来そうだということである。会社での安定な生活を振りきって、困難な道を歩んでいこうとする彼の姿勢は私などとても真似のできないものであり、感動をおぼえる。

科学技術基本法が昨年成立し、政府は科学技術創造立国を目指して財政的に、てこ入れをしようとしている。誠に結構なことである。しかし、入れ物や研究費だけに金をつぎ込んでも主体となるべき人がいなければどうしようもない。特に次代を担う若い世代を育てていく必要がある。それは我々に課せられた義務である。しかし、それにしても人を育てることが、いかに難しいか思い知らされるこの頃である。

教育は日本語では“教え育てる”であるがドイツ語では“Erziehung(引き出す)”である。日本語の様に単に教えるというのではなくてドイツ語の原義のようにそれぞれの人の個性を見抜いて良い点をのばしていくのが良い教師なのであろう。さらに最優秀の教師はウィリアム・アーサー・ワードの言うように「心の火をつける」ことができる人であらう。点火しやすい状況になっているかどうかで難易は異なるであろうが自分自身を振り返ってみてはたして何人の心の火の点火に貢献できただろうかと忸怩たる想いにかられる。

幸い、日本にはまだまだ若くて優秀な人達がいる。日本の将来に対してあまり悲観的にならずにそれらの若い人達に未来を託していこう。できるだけその人達の邪魔をしないように注意しながら。

